

INVITATION

Ehime University Hospital [愛媛大学医学部附属病院広報誌]

VOL

36

2014

愛媛大学医学部

●特集 時代に対応した 新たな技術・治療方法をめざして

DOCTOR'S VOICE 01 世界へ貢献する先進医療

DOCTOR'S VOICE 02 遠隔操作型ロボットで前立腺癌摘出手術

DOCTOR'S VOICE 03 情報交換と人材派遣を期待

DOCTOR'S VOICE 04 新しい診療部門、人工関節センターの設置



新薬や医療機器の開発が医学を前に進め、国を支える産業となる

薬物療法・神経内科 臨床薬理センター 教授 野元正弘

日本の産業は、約40年周期で戦争や経済危機を乗り越え発展してきました。文明開化以降、資源の乏しい日本の産業界は加工貿易を重要視してきました。医療の分野では薬は海外で生み出されたものを輸入すればよいと思われてきました。しかし、現在、日本産業の主力を担ってきた電気機器・自動車産業は海外に拠点を移しており、それに替わって、これからの40年、その中心を担っていくのが医療・健康産業です。日本は、産業革命後の加工貿易から研究・開発に力を入れてきたイギリスなどのヨーロッパを見習い、医療・健康産業を発展させなければなりません。これらの産業の進歩が日本だけでなく世界を含め、国際的な社会貢献へと繋がります。海外での研究・開発によって生み出された薬を導入すればいいという意識を替え、新しい治療法や薬の研究・開発を日本自らが、医学と薬を進歩させていく必要があります。

愛媛大学は、国立大学の中では最も早く、薬の研究・開発専用の病棟を2010年4月に設置しました。私の所属する薬物療法・神経内科では、患者さんの協力の下、この病棟を使って新規の治療薬の開発や既存の薬の安全な使用法について研究しています。薬の開発には短くても10年はかかり、膨大な資金やマンパワーを必要とします。施設が設立され、当時試験を始めた薬が、現在、第Ⅲ相試験と呼ばれる検証試験の段階にあり、あと3年ほどで実際に患者さんに使うことができるようになります。また、第Ⅱ相試験の段階の薬もあり、日本をはじめ世界でも広く使えるようになる薬が愛媛から発信できる日も近いと思います。

薬の進歩が医学の進歩であり、結核がよかったのも、現在がんが治る病気といわれるのも薬のおかげです。もちろん手術や医療機器も進歩していますが、医学研究のゴールは治療薬が中心です。だから、いい薬を作るといことが医学を進歩させるのです。

当院の役割としては、そうした先端医療の結果を日常の診療に還元することです。先進医療を生み出すとともに、それを連携病院へ広げていくという役割があります。このために当院と人事交流のある愛媛県内外の病院とともに連携病院長会議を開催しており、その中の先進医療協議会での情報発信・共有も大きな責務だと思います。



PROFILE

のもとまさひろ◎鹿児島県出身、群馬大学医学部卒業。1986年～88年環境庁国立水俣病研究センター医長。90年から、鹿児島大学医学部准教授。2001年から同職。専門領域は薬物療法・神経内科学（臨床薬理学、神経内科学）。趣味は空手（第15回東医体個人優勝）、山登り、今年は北アルプスに挑戦する予定。

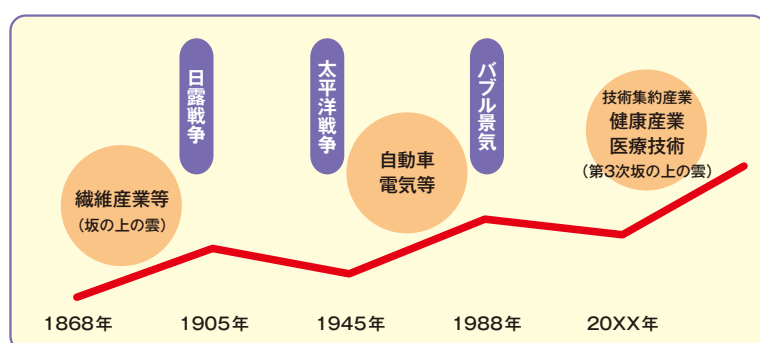


図1：40年周期で推移する日本の産業

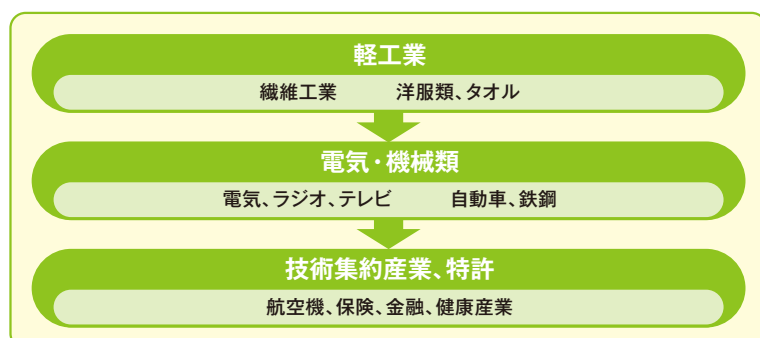


図2：主となる産業形態の移り変わり



当院3号館の臨床薬理センター

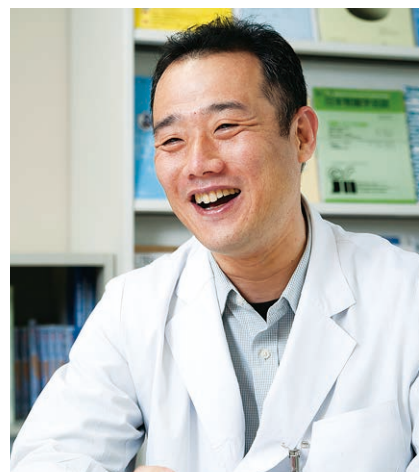


薬物療法・神経内科 LC/MS/MS

患者さんのQOL (Quality of Life: 生活の質) だけでなく、手術をする側もメリットがあります

泌尿器科 助教 宮内勇貴

内視鏡手術支援ロボット「da Vinci (ダヴィンチ)」導入前は、腹腔鏡による前立腺の全摘手術を導入していました。その段階では、視野が狭く手術時に出血が多いという問題点が克服され、低侵襲な手術で非常にやりやすかった反面、手術の質や繊細さにやや問題点があると感じていました。「da Vinci」を導入して手術をしてみると、より繊細な手術が短時間でできるようになり、私たちも手術がやりやすく、患者さんの術後の結果も良好でした。「da Vinci」のメリットはたくさんありますが、まずは高度な神経温存手術ができることです。前立腺の周りには勃起神経など多くの神経があります。神経温存手術はこれまでも行われていましたが、「da Vinci」の導入により、高画質な立体画像で組織を見ながらできるので、丁寧に確実に神経を温存できるようになりました。また、前立腺周辺の全体的な観察も非常に鮮明にでき、術後の尿失禁の予防などについても確実に行えます。ただ単にがんを取り除くということだけではなく、手術を受けた後の患者さんの身体への負担軽減、QOLを保つということに関しても格段によくなりました。このことは、術後の患者さんを見ていて私自身も非常に実感しました。今後の課題は、がんをきれいに取りきるだけでなく、性機能や尿禁制といったQOLを高めていくことなど、「da Vinci」による前立腺手術の質や精度をより高めていくと考えています。



PROFILE

みやうちゆうき◎愛媛県松山市出身、1997年愛媛大学卒業。専門分野は主に腎移植、腎不全、腹腔鏡手術、泌尿器腫瘍全般。日本泌尿器科学会指導医、透視学会専門医、泌尿器内視鏡学会認定医、日本移植学会認定医、がん治療認定医などの資格を持つ。高校時代からラグビーをしており、ポジションはセンター。最近は時間があれば朝のジョギングをしている。

愛媛大学医学部附属病院に期待すること

— 地域住民のために存在する松山市民病院 —

松山市民病院長 山本祐司

愛媛大学医学部附属病院に最も期待するのは「情報交換」です。現在、症例について附属病院で対応した方がいいのか、治療薬や手術はどうするのかといったことは日常レベルで情報交換・共有が多く行われています。これを更に高いレベルに引き上げるには各病院が単独で診療している症例についても情報交換することが必要だと考えます。次に期待することは「人材派遣」です。附属病院の檜垣病院長も各病院との連携を重視した発言や発信をされています。そこで意図されているのは、互いに密なコミュニケーションを取りながら診療にあたることだと私は理解しています。人材派遣が活性化すれば症例の情報交換も盛んになるだけでなく、附属病院の野元先生がされている臨床研究のサテライト的使用も増えるでしょう。それぞれの連携病院では考え方や立場も違うでしょうが、附属病院には設備やお金の連携だけでなく、互いに同じ気持ち・志を持ての連携をお願いしたいです。それは難しいことではないと考えます。

さて2014年、当院は財団法人永頼会設立50年という節目の転換期にあたります。4月1日には新南(S)病棟の第1期オープンを迎えます。この転換期に、新しい多様な人材の育成に力を入れるということで「変革と育成」というスローガンを掲げました。今後も松山の地域医療を守り、育て、支える役割を果たしてゆく決意であります。



PROFILE

やまもとゆうじ◎岡山県出身、1973年岡山大学医学部卒業。日本脳神経外科学会専門医、脳卒中専門医。未破裂脳動脈瘤・低髄液圧症の治療、顔面けいれん・三叉神経痛に対する微小血管減圧術を多数経験。岡山大学脳神経外科を経て、1979年、財団法人永頼会松山市民病院に赴任。部長、副院長を経て、2009年同病院長。大学時代は空手部所属。趣味はゴルフ。

よりよい人工関節を、より多くの患者さんに

人工関節センター長 三浦裕正

今年1月からスタートした人工関節センターは、臨床部門、研究開発部門、手術教育部門、オステオサイエンス部門という4部門から構成され、臨床・研究・教育の統合型センターを大きな特徴としています。臨床部門は高度の人工関節手術を患者さんに提供する部門であり、研究開発部門では、医工連携研究を通して、オリジナルの次世代人工関節の研究開発を進めています。手術教育部門では、手術手技研修センターとの連携のもとに、献体を用いた手術トレーニングによって、未来の人工関節医療を担う医師や看護師の技術向上をはかります。また、オステオサイエンス部門は、骨に関する基礎研究を行う部門です。愛媛大学に集結した骨関連領域の優



人工関節センターの概要

れた基礎研究者が連携し、変形性関節症の病因・病態の解明や合併症の予防に取り組んでいます。今後は、このセンターから、よりよい人工関節をより多くの患者さんに提供できるようにしていきたいと考えています。



PROFILE

みうらひろまさ◎長崎県出身、1982年九州大学医学部卒業、医学博士。九州大学医学部准教授などを経て、2010年から整形外科教授。変形性膝関節症に対する人工膝関節置換術を専門として、国内の臨床、基礎研究をリード。2006年から現在まで連続してBest Doctors in Japanに選出。趣味は渓流釣り、読書。

地域医療支援センター 指導医講習会を開催



当院地域医療支援センターが、地域医療の更なる充実・発展を目的に、南予・東予地区にて平成25年度愛媛県病院指導医講習会及び病院連携記念講演会を開催しました。両地区とも病院、各市町の行政機関等からそれぞれ約40名の参加があり、特別講演等の後、活発な質疑応答が交わされ、地域医療の現状と諸課題等について考える良い機会となりました。今後も地域医療を担う医師の養成を推進していきます。

地域医療支援センター ☎089-960-5990

愛媛大学医学部 連携病院長会議を開催



当院と122の医療機関が、医師の育成・交流、先進医療、地域医療等の情報交換を目的に平成26年3月1日(土)、松山全日空ホテルにて、第26回愛媛大学医学部連携病院長会議を開催しました。安川正貴研究科長と檜垣實男病院長から医学部、附属病院の近況報告の後、中島和江部長(大阪大学)、清島真理子教授(岐阜大学)、洲上忠彦院長(松山赤十字病院)から講演があり、参加者は熱心に耳を傾けていました。

総務課企画・広報チーム ☎089-960-5943

編集後記

陽春の候を迎え、大学病院も多くのフレッシュな医療スタッフを迎え活気に溢れております。本号では、連携病院長会議における臨床研修、先端医療、地域医療ネットワークの3専門部会のうち、先端医療についてご案内させていただきます。また内視鏡手術支援ロボット(da Vinci)の導入、松山市民病院山本祐司院長の当院に期待すること、人工関節センターの設置などもご紹介いたします。また地域医療支援センターも地域枠入学生を含めた全若手医師育成を目的に各地区の指導医との連携を行いつつあります。本年度も引き続き当院へのご指導・ご鞭撻を何卒宜しくお願い申し上げます。

広報委員会委員長 高田清式

◎表紙
病院長 檜垣実男
総合臨床研修センター長 高田清式
看護部長 田淵典子
新人研修医、看護師
—— 医学部本館 ——



愛媛大学医学部附属病院

〒791-0295 愛媛県東温市志津川 ☎089-964-5111 (代)
ホームページ <http://www.hsp.ehime-u.ac.jp/>